

第1回オーストラリア短期英語研修： 単位認定と海外体験学習の両立を目指して

松村 真樹

キーワード：短期海外派遣、英語留学、オーストラリア

1 はじめに

2006年から長崎大学は、日本人学部学生向けに、海外の現地大学で3週間程度の語学研修を行なう「海外短期語学研修プログラム」を開始した。まず、中国語研修が2006年9月に北京教育学院で行なわれた。続いて、2007年の2月から3月にかけて、英語の短期研修が、オーストラリアのパースにあるエディスコワン大学で実施された。さらに今後、フランス語と韓国語の研修プログラムが2007年度中に実施されることが予定されている。これらのプログラムを修了した学生は、全学教育（教養教育）課程で履修すべき当該外国語1科目分の単位を認定され、その履修を免除されることになっている。こうした方法を導入することによって、長崎大学は、より多くの学生を海外に派遣し、外国の大学での修学体験の機会を増やすことを目指している。すなわち、「単位認定」をひとつのキーワードとして、日本人学生の海外派遣および語学力向上を推進しようという試みである。そして長崎大学では、留学生センターと全学教育外国語科目担当部局である大学教育機能開発センターが共同で、このプロジェクトの遂行にあたっている。

留学生センター教員である筆者は、オーストラリアにおける英語研修プログラムの立ち上げ準備にかかわり、2007年2月の第1回研修実施時には、引率者として参加学生20人のグループに同行した。その意味で、少なくとも英語研修については、プログラム遂行者側の立場から、このような試みの一部始終を経験したと言ってよい。いっぽう、普段は留学生センターで、おもに外国からの留学生に対する教育および指導を担当する立場の人間が、日本人学生グループの海外派遣という新たな領域にかかわったことによって気づいた点も多々ある。本稿では、筆者自身の経験と参加した学生による感想を基

に、長崎大学における第1回オーストラリア短期英語研修プログラムの発案から終了までの経過をたどりながら、こうした試みが真に目指すべきものは何かを再検討してみたい。

2 第1回オーストラリア短期英語研修プログラムの概要

2-1 計画・視察

長崎大学は中期計画の中で、教養教育の成果に関する具体的目標として、「国際化が進む世界で、異文化を理解しつつ世界の人々との的確に意思の疎通を図るため、英語能力のみならず、複数の外国語を修得し、外国語能力の向上を目指す」ことを掲げている。こうした目標に沿い、2005年から必修外国語科目である英語と選択科目である中国語、韓国語、フランス語について、海外語学研修立ち上げのための現地視察調査を開始した。英語研修の派遣先には、オーストラリア領事館職員からの推薦もあり、西海岸のパースにキャンパスをもつエディスコーワン大学（ECU）が候補地として選ばれ、2006年3月に大学教育機能開発センターと留学生センターからそれぞれ1名の教員が5日間の日程でパースを視察し、ECU付属のインターナショナルイングリッシュセンター（ECU付属英語学校）を訪問した。

ECU付属英語学校では、おもに1年生を対象とした、長崎大学の学生のみから成るプログラムをオーダーメイド方式で開設してもらう方向で協議が行なわれた。研修期間中、学生たちはパースの一般家庭にホームステイすることになる。こうしたプログラムは、ECUがスタディーツアーと呼ぶもので、語学学校での英語学習とホストファミリーにおける実践的英語使用、そして異文化理解のための日帰り見学旅行（エクスカージョン）を組み合わせた「海外体験学習」にあたる。このような語学研修に参加することにより、英語運用能力のみならず、海外の人々との交流や異文化への理解をさらに深めることが期待される。これに関連して、留学時期として当初、日本の夏期休暇に相当する8月ごろを考えていたが、現地スタッフは、さまざまな見学旅行や課外活動の機会を最大限利用するためには、現地の夏に相当する2月か3月が良いと提案してきた。また、この時期は、現在、日本の他大学のプログラムがあまり実施されておらず、英語を学ぶ環境としては適していることや、さらにホームステイ受入れ先も探しやすいという利点がある。こうして、2007年2月派遣に向けて協議を継続することで意見が一致した。

視察中に両教員の間で浮上した検討課題は渡航ルートである。今回企画した短期英語研修は、授業料が有料で、ホームステイ滞在費用等を含めると、学生一人あたりの参加費用は約20万円に相当する。これに渡航費や海外保険等の費用を加えたものを、学生が全額負担することになる。したがって、渡航費をいかに低料金に抑えるかということが、研修参加者の経済的負担軽減につながるわけであるが、長崎が位置する地理的条件を考えた場合、それは航空機の乗り継ぎを余儀なくさせる。すなわち、福岡空港からシンガポールを経由して、パースに入るというルートである。このことを前提にして、今回の視察ではこのルートを利用した。その結果、視察した教員の間で懸念されたことは、シンガポール空港での乗り換えのための待ち時間が3時間以上と長く、またパース到着が深夜となるため、学生のストレスが多くなるのではないかということであった。さらに、シンガポール空港内は非常に広く、もし海外渡航経験のない参加者が多かった場合、乗り換えのための搭乗口確認を学生だけで行なえるかも懸念された。これらの問題に対する可能な解決策として、成田空港からの直行便利用が考えられるが、学生のコスト負担が大きくなることが明らかで、この案は断念せざるをえなかった。代案として、とりあえず第1回目の研修には、引率教員同行の経費を長崎大学に申請することが提案された。視察から戻った後、渡航ルートの決定と総費用の見積もり、旅行代理店の選択が行なわれる一方、研修内容やレベルの検討、そして最終的に長崎大学による「単位認定」の承認へと協議を進めていった。その間に、ECUから研修実施条件(Terms and Conditions)が届き、長崎大学留学生センター長とECU付属インターナショナルイングリッシュセンター長との間で、それらの条件について合意書が交わされた。これをもって、本研修プログラムは長崎大学が正式に認めた留学プログラムとなった。

ここで、現地の受け入れ態勢に関連して、ECUと長崎大学の間を橋渡しした民間機関の存在に言及しておきたい。パースには、マックスリンクという日本人が運営する民間の留学情報センターがある。マックスリンクは、日本人向けのオーストラリア留学相談や大学及び語学学校紹介を行なっている。視察中はマックスリンクのスタッフとも協議し、プログラムの準備段階のみならず、長崎大学生のパース滞在中も、学生生活支援や緊急時の対応等を通じて、マックスリンクから長崎大学の研修プログラムに対して協力が得られることを確認した。このことは、視察における意義ある成果だったと言える。

2-2 参加者募集・出発前オリエンテーション

新しく始まったオーストラリア短期英語研修を広く学生に紹介し、参加者を募る目的で説明会を2回行なった。まず、2006年5月末に第1回目を実施した。ちょうどこの時期、福岡でオーストラリア留学フェアが開催されており、ECUからも広報担当の職員が来日していた。この職員とは現地視察を通じて面識があったので、長崎まで来ていただき、学生たちにECUやパスについて紹介してもらった。オーストラリアの大学関係者がオーストラリア留学について紹介するという、長崎大学ではめったにないこの説明会には、約50人の学生が集まった。しかしこの時点では、具体的な研修プログラムの内容については決定していなかったため、ECUの一般的な紹介に終わった。その後、7月末に実施した2回目の説明会では、より具体的なプログラム内容や費用、そして申し込み方法について説明が行なわれた。この時は、30名程度の学生が集まった。そして、最終的に申し込みを行なったのは24名であった。当初、20名から25名程度の参加者を想定していたので、選考等は行なわず、24名全員を参加させることに決定した。しかしその後、個人的理由から参加を辞退する学生が現れ、最終的にパスに出発したのは20名であった。

参加希望者に対する出発前オリエンテーションを始めたのは、2006年10月であった。続いて、11月、1月、2月にそれぞれ1回、計4回のオリエンテーションが行なわれた。10月のオリエンテーションでは、ECUから送られてきたホームステイに関する調査票を記入してもらった。この調査票に基づいて、ECUがそれぞれの学生に対してホームステイ先を決定する。11月のオリエンテーションでは、旅行代理店の関係者に来てもらい、オーストラリア入国のためのビザ（電子入国許可）の申請方法および海外旅行保険の加入方法を説明してもらった。さらに、1月のオリエンテーションでは、入国カードの記入方法や検疫情報といった入国に関する手続きと気候等の現地事情を説明した。そして、最後の出発前オリエンテーションにおいて、ホームステイ家族に関する情報を提供した。それぞれのオリエンテーションには、1時間ほどを要した。

一見してわかるように、計4回にわたる出発前オリエンテーションは、いわゆる渡航手続きに終始していた。また、内容も初めから計画的に予定されていたわけではなく、ECUやマックスリンクから資料が送られてきた時期に合わせて催されていた。また、参加学生の海外渡航に関する知識が事前に

把握できていなかったため、こちらで必要と思われる一般的な手続きから始めざるを得なかったことも事実である。現在の感想としては、渡航手続きに関する情報のみであれば、1回のオリエンテーションにまとめてしまうことも可能だったように思われる。いっぽうで、オリエンテーションについて多くの学生が指摘したことは、ホームステイに関する情報をもっと早いうちに教えて欲しかったというものが目立った。また、現地で必要になる費用（例えば、通学のための交通費等）はどれぐらいかをもっと具体的に教えて欲しかったといった意見も多かった。たとえ3週間とは言え、学生にとっては、確かにこのような情報こそが不可欠である。オリエンテーションの回数が多かったわりには、本当に伝えなければならない情報が伝えられていなかったことは否めない。この点は、初めての試みということで、オリエンテーション主催者が、参加学生がどのような情報を必要としていたかを十分把握していなかったことによる。次回からのオリエンテーションでは、できれば今回留学した学生にも参加してもらい、改善していく必要があると思われる。ただ、留学という観点から考えた場合、「手取り足取り」指導して、すべてを教えることが良いのかどうか疑問が残る。むしろ、出発前から留学はすでに始まっているのであって、参加者自身がもっと積極的に必要な現地の情報を収集してこそ本当の海外派遣の意味がある、と考えるのは筆者だけだろうか。

2-3 英語研修の内容

筆者は、今回の研修の1週目と3週目に、それぞれ1週間ずつ学生たちと行動をとともにした。本節では、それらの期間の出来事を中心に、第1回オーストラリア英語研修の内容を紹介したい。長崎大学生20名のグループは、2007年2月18日に福岡空港からシンガポールを経て、オーストラリアのパスに向かった。福岡からシンガポールまで約6時間半、シンガポール空港で乗り継ぎに4時間近くを費やした後、パスまでさらに5時間におよぶ行程である。また、福岡空港を午前10時過ぎに出発する飛行機に乗るために、全員が空港近くのホテルや福岡近郊の実家もしくは友人の実家に前泊した。パス空港到着は、2月19日午前2時。ちなみに、パスとの時差は1時間であるが、この時期は夏時間を採用していたため日本との時差が縮まり、時差0時間であった。空港には、ECU付属英語学校とマックスリンクからそれぞれ

スタッフが1名ずつ出迎えに来ていた。到着が早朝（夜中）ということもあり、ECUがホテルを用意してくれていた。空港からホテルまでECUが手配したバスで移動する途中、学生たちは、研修に関する様々な注意事項を聞くことになった。ホテルで3、4時間の睡眠を取り、朝食後、また同じバスでホテルから英語学校があるECUのチャーチランズキャンパスへ移動した。こうして、パース到着と同日の2月19日午前11時から初日オリエンテーションが始まった。

初日オリエンテーションの内容は、パース滞在とホームステイに関する一般的な注意事項に加え、英語のレベル判定テストが行なわれた。判定テストを終えた後、昼食をとって、市内ツアーが行なわれた。前日の朝から丸一日以上をかけてパースに到着した後、ほとんど寝る間もなく初日オリエンテーションに参加していた学生たちであったが、市内ツアー中は初めてのパース体験で、いきいきと輝いていた。しかし、夕方、ホストファミリーがECUに迎えに来る時間が近づくに連れて、少し緊張気味の学生も多く見られた。引率者にとっては、さほど気に留めていなかったことであるが、初めての海外体験で研修に参加している学生にとっては、生まれて初めて外国人の家庭に滞在するという事は、やはり一大イベントなのであろう。こうした意味からも、前節で述べたように、出発前オリエンテーション中に、もっとホームステイについての項目を扱うべきであったと感じた。

研修2日目からの日程は、以下の表のようになっている。1週間を通して、教室における英語の授業と学外での見学旅行（エクスカージョン）が組み合わされた形になっている。基本的に、火曜から金曜が英語の授業、土曜から月曜にかけて見学旅行が予定されていた。午前中の英語の授業は、朝9時に始まり、10時45分から30分間の休憩を挟んで、午後1時まで行なわれる。昼休みは45分間で、午後の授業は、1時45分から始まる。3時から15分間の休憩があり、4時に午後の授業が終わる。

ECU付属英語学校が設定したスタディーツアーの基本的枠組みに、長崎大学側から、長崎大学における単位認定のための審査資料の一部として、研修中にエッセイを2本書いて提出するという課題を加えてもらった。これに対して、ECUの英語学校は、外部からゲスト講師を招いてエッセイの書き方に関するワークショップを時間割に加えてくれた。すなわち、第1週目の木曜日の午後にエッセイの書き方のワークショップを受け、そのすぐ後、プ

Nagasaki University Study Tour Itinerary Feb-March 2007

Monday 19/2	Tuesday 20/2	Wednesday 21/2	Thursday 22/2	Friday 23/2	Saturday 24/2
Arrive Perth, Transfer to Hotel	English Class	English Class	English Class	English Class	
Breakfast	1. 00pm Lunch	1. 00pm Lunch	1. 00pm Lunch	1. 00pm Lunch	10. 00-4. 00 Fremantle & Markets
Transfer to Churchlands Campus	English Class	English Class	English Class (Workshop on Essay Writing)	English Class	
Sunday 25/2	Tuesday 27/2	Wednesday 28/2	Thursday 1/3	Friday 2/3	Saturday 3/3
Swan Valley Tour	English Class 1. 00pm Lunch English Class	9. 00-5. 30 Rottnest Island Day Tour			
Sunday 4/3	Tuesday 6/3	Wednesday 7/3	Thursday 8/3	Friday 9/3	Saturday 10/3
Free Day with Host Families	English Class 1. 00pm Lunch English Class	English Class 1. 00pm Lunch English Class	English Class 1. 00pm Lunch English Class	English Class Certificate Presentation & Farewell Lunch	1. 00pm Arrive Campus for Transfer to Airport
	Monday 5/3	Monday 5/3	Monday 5/3	Monday 5/3	Monday 5/3
	Aboriginal Culture Experience	Aboriginal Culture Experience	Aboriginal Culture Experience	Aboriginal Culture Experience	Aboriginal Culture Experience

プログラムコーディネーターからエッセイのテーマをもらい、次の週の火曜日にエッセイを提出するというスケジュールをこなした。第2週目も同様に、木曜日にもらったテーマについてエッセイを書いて、第3週目の火曜日に提出した。こうして提出されたエッセイは、プログラムコーディネーターが添削して、各学生に返却された。学生たちは、帰国後、返却されたエッセイを修了証書及び成績証明書といっしょに、単位認定のために長崎大学へ提出した。後でプログラムコーディネーターから聞いた話では、長崎大学へ提出することを考慮して、エッセイの添削は最小限に抑えたそうである。ECU付属英語学校が、この研修の「単位認定」の側面に配慮している点が窺える。

エクスカージョンは、プログラムの一部として実施されるため、全員参加が義務付けられており、実際、全員がすべての見学旅行に参加した。また、現地のガイドが同行し、見学先では英語で説明が行なわれるため、単なる観光ではなく、英語学習の一環と考えられている。まず、到着後初めての土曜日には、パースから車で30分ほど南に下ったところにあるフリーマントル (Fremantle) を訪れた。インド洋に面したこの港町で、学生たちは、イギリスからの開拓者が移民した当時の建物を見学したり、植民地時代の刑務所等を見学することによってオーストラリア史を学んだ。その翌日の日曜日には、スワンバレー (Swan Valley) ツアーに参加し、カバシャム (Caversham) 自然公園やマーガレットリバー (Margaret River) チョコレート工場を見学した。続く月曜日は、パース市内にある造幣局を見学した後、市内を散策し、パース市内からそれぞれのホームステイ先まで自分で帰宅するというコースであった。第2週目の週末にも、インド洋に浮かぶリゾート地、ロットネスト (Rottnest) 島への1日ツアーという大きなイベントがあった。オーストラリアの自然を体験するという企画であったが、観光の要素も多分に含んでいたように思われる。

プログラムの第3週目には、火曜と木曜の2回にわたって、学生によるグループ・プレゼンテーションが行なわれた。プレゼンテーションと言っても、長崎大学用のプログラムの中で行なわれるため、聴衆も長崎大学の学生と担当教員だけであった。あくまでも英語によるオーラルプレゼンテーションのスキル習得が目的であり、テーマや内容そのものが問題となるわけではない。この点は、あらかじめ担当教員が限られた時間で準備できるテーマを選ぶよう学生に指導していたことからわかる。また、時間的制約から個人による

発表ではなく、3人ないし4人の学生がグループ単位で発表し、その中でそれぞれの学生が各自の分担項目を発表するという方法が取られた。こうして火曜日には、準中級クラスにいる学生が3つのグループに分かれて、それぞれ「ECUについて」「日本の祭り」「日本のアニメ」というテーマでプレゼンテーションを行なった。また木曜日には、中級クラスの3つのグループが、「となりのトトロ」「オーストラリア人はなぜ日本車を好むのか」「沖縄について」というテーマを発表した。筆者は、これら2回のプレゼンテーションを傍聴したが、日本人同士で、あまり珍しくもないテーマについて、英語で説明しあっている光景には、微妙な違和感を覚えずにはいられなかった。しかし、これもカリキュラムの制約によるものと、後ほど担当者から聞かされて納得した。ただし、そういう内容でさえ、準備にはかなりの時間を要したようで、そのために通常の授業時間を割いて、発表準備のために使わせてもらっていたことを付け加えておきたい。

プログラム最終日の午後は、修了式が行なわれた。まず、修了式の前にバーベキューパーティーによる1時間ほどの昼食会が催された。その後、学生一人ひとりに修了証書と成績表がECU付属英語学校のプログラムコーディネーターから手渡された。その他にも、ECUから学生に対していくつかの記念品が用意されていた。さらに、引率教員に対しても「感謝状 (Certificate of Appreciation)」と記念品を用意するといった気の使いようであった。普段、この様なスタディーツアープログラムを頻繁に行なっているECU付属英語学校の状況が読み取れる。学生たちも非常に満足していたようである。また、成績表は、スピーキング、リスニング、リーディング、そしてライティングの4つの領域について、それぞれA(80%以上)、B(75%)、C(70%)の3段階で表記したものが発行された。ECU付属英語学校が行なっているスタディーツアーの場合、修了証書のみで、成績表は発行されないプログラムも多くあるらしい。しかし今回は、長崎大学における単位認定のために成績表を発行してもらうよう事前に依頼しておいたので、学生たちは、成績表も手にすることができた。

修了式の翌日は、いよいよ帰国の日となった。まずECUのキャンパスに全員が集まってから、ECUが手配したバスでいっしょに空港に向かった。ほとんどの学生がホストファミリーにECUまで送って来てもらっていたが、学生たちにとって別れの時間は、さすがに感無量だったのではないだろうか。

パース到着後、ホストファミリーとの対面を緊張して迎えた学生たちであったが、3週間経った今、堂々と、そして生き生きとホストファミリーと会話している学生たちを目の当たりにして、たった3週間でこれほど変わるものであろうかと思ったほどである。実際、3週間という短い期間に、学生たちは非常に多くのことを学び、それぞれ多くの経験を携えて帰路に着いたのではないだろうか。これをもって、3週間の長かった「ツアー」が完結した。

3 研修参加者の感想

修了式の前日に、参加学生にアンケート用紙を配布した。アンケートは、質問紙による自記式によって行なわれ、無記名で、福岡空港到着時に提出してもらった。参加学生20名のうち、19名から回収することができた。アンケートの項目は、これまでの経過に沿って、出発前オリエンテーションからプログラム期間中にわたり、英語学習およびホームステイを中心にカバーした。最初に、本プログラム参加の動機をアンケートの結果に基づいて概観してみよう。(この質問は、選択肢を与えられていない自由回答式で、1人の回答者が複数の目的を挙げているので、累積人数は回答者数の19名を上回る。) まず、「英語学習」もしくは「英語力向上」を参加の目的に挙げている学生が14名いた。続いて多く見られた理由が「異文化体験」(12名)であった。また、5名が「ホームステイを体験したかった」と回答している。その一方で、「単位が修得できる」ことを参加の理由に挙げた学生は、約4分の1の5名にとどまった。

さて、これらの目的を達成できたかどうかについては、19名中、7名が「大いに達成できた」、12名が「まあまあ達成できた」と回答した。また、英語力の向上について、「自分の英語力が向上したと思いますか」という質問に対し、「大いに向上した」「少し向上した」「あまり向上しなかった」「まったく向上しなかった」「わからない」の5つの中から選んでもらったが、その結果、3名の学生が「大いに向上した」と回答し、「少し向上した」と答えた学生は14名、そして残る2名が「あまり向上しなかった」を選んだ。やや控えめな結果と受け取れるが、3週間という短期間を考えた場合、学生たちの正直な感想かもしれない。その半面、「今回の研修を通じて、英語学習に対する意欲は向上しましたか」という質問に対しては、17名が「意欲が大いに向上した」と回答し、2名が「少し向上した」と答えた。このように、少なくともこのプログラムは、

学生たちの英語学習意欲を向上させたことには間違いない。

つぎに、本研修プログラムの実施条件についての感想を見てみたい。まず、学生たちは2月から3月にかけての春休み期間中に留学したわけであるが、この実施時期については、19名中、17名が「今回の時期でよい」と回答している。やはりオーストラリアの夏にあたるこの時期に人気があるのではないだろうか。ただし、2名の学生は、時期的にはこの時期でよいが、学期末試験が終わってすぐよりも、試験後1週間ほどしてからの方が準備しやすいというコメントを加えている。また、研修期間については、7名がもっと長い研修期間を希望し、残る12名は「今回ぐらいの日程（3週間）でよい」と答えた。研修先についても、16名が「今後もこの場所がよい」と回答した。いっぽう、我々が懸念していた渡航ルートについては、17名が「今回のルートでよい」と答えており、「費用が高くなっても、もっと便利に行けるルートがよい」を選んだ学生は無く、2名が「どちらとも言えない」と回答した。最後に経費についてであるが、13名が「適当だと思う」と回答し、5名は「安いと思う」と答えた。反対に「高すぎると思う」と答えた学生は1名だけであった。

これらの結果から、今回の参加者は、研修プログラムの実施条件について、おおむね満足していると言える。実施条件について今後検討すべき点があるとすれば、出発日についてである。今回の経験が示唆するところは、学生たちの出発前準備に要する時間を考慮して、学期末試験の後、少なくとも1週間ぐらい経ってからの出発が望まれるのではないだろうか。さらに、日曜日の出発を土曜日に繰り上げることによって、深夜到着によるストレスを軽減し、月曜日の研修プログラム初日に十分な体勢で臨むことができるのではないかと思った。この点については、すでに現地のスタッフにも相談しており、次回の研修日程を決める際の決定要因のひとつになると考えられる。

ここで、ホームステイに関する学生たちの感想についても若干触れておく。ホストファミリーとの英語によるコミュニケーションについての学生の感想は、「全く問題なかった」と「ほとんど問題なかった」を合わせると15名で、4名の学生が「かなり難しかった」と答えた。また、ホームステイ先での生活については、全員が「生活は快適であった」と答えている。出発前、学生たちはホストファミリーとの接し方についてかなり不安を抱いていたが、実際には、問題は少なかったように思われる。もちろん、ホストファミリーが以前に何度も日本から留学生を受け入れており、日本人学生と接することに慣れてい

るという事実も見逃してはならない。ただし英語によるコミュニケーションについては、「言いたいことを言えない苦しみを初めて体験した」「思ったことを英語で話せない」「ホストの言葉を聞き取るのが難しかった」といったような個別のコメントもいくつか見られた。

最後に、参加者のプログラム全般についての印象を、「あなたはこの研修プログラムを、友人や後輩に勧めたいと思いますか」という質問に対する回答を基に分析してみよう。19名中、17名が「勧めたいと思う」と答え、2名は「どちらとも言えない」と答えた。また、「勧めたいと思う」と回答した場合、その理由を自由に書いてもらった。学生の回答の一部を紹介すると、「学校にも行けて、ツアーにもいける」「英語のみでなく、大いにたくさんのことを学べる」「日本とオーストラリアの違いを肌で感じるができる」「楽しく（英語を）勉強できる上に、単位も修得できる」「ホームステイは貴重な経験になると思うから」「英語はもちろん、様々なことを学ぶことができる」「日本ではできないことがたくさんできる」「費用もそう高くないから」「環境が良い」「日本にいるときにはできない経験ができる」「自分の視野が広がる」「良い経験がたくさんできる」「英語の勉強にもなるし、文化の理解にもなり、また自分の視野も広がる」というようなものであった。このように、多くの学生が、この研修の英語学習以外の特色を重視している点が興味深い。主催者側は、「参加すれば、全学教育の英語の単位になる」ことを強調していたが、実際の参加者は、明らかに単位以上の何かをこの研修に期待していたことが窺える。

4 引率教員の感想

全学教育の必修外国語科目である英語を受講している1年生の学生に対して、留学生センターがオーストラリアにおける短期英語研修のための窓口となり、その派遣のサポートをする。そして、研修プログラムを修了した学生は、当該英語科目担当部局である大学教育機能開発センターで単位認定を受けることによって、2年次に開講されている全学教育の英語の授業1科目の履修を免除される。手続き的には、このような計画に基づいて、今回の派遣はスタートした。しかし長崎大学では、留学生センターの教員がこうした試みにかかわることは初めてのことであり、それに伴って、いくつかの困難があったことも否めない。例えば、筆者は普段、日本人学生の指導に直接かか

わっていないため、今回の研修参加者についても、説明会で始めて顔を合わせる学生ばかりであった。そして、これらの学生は、全学教育の英語科目を通じて文字通り全学から集まってきたわけで、そのバックグラウンドは多様である。ちなみに、学生同士でもあまり面識が無く、今回の研修を通じて友達になったケースも多く見られた。まして、この学生たちの英語力などについては分かるすべもない。さらに重要なのは、学生たちの性格や海外適応能力について、全く想像ができないことであった。半数ぐらいの学生が、今回の研修のためにパスポートを生まれて初めて取得したことから考えて、まったく海外渡航経験のない学生がそれだけ参加していたことも事実である。しかし、それぞれの学生について、より詳しく知るためには、4回の出発前オリエンテーションだけでは不十分であった。この点が、例えば1学期間ゼミを受講した学生を、夏期休暇中に当該ゼミの一環として海外へ連れて行く海外体験学習とは異なる。

実際に参加者を引率してみると、上述したような理由から、若干の戸惑いを感じられた。それはひとことで言うと、このプログラムについての筆者自身の見方が「単位認定」と「海外体験学習」の間で揺れていたということである。他の外国語も含めて、今回の研修プログラム案が浮上したとき、長崎大学内の議論の焦点は、研修を「単位化」することは可能かどうかを集約されていた。そこで見られた意見の多くは、「本来なら1学期間かけて履修する外国語科目の1単位を3週間で修得させてしまうことは妥当か」あるいは「授業内容やレベルが長崎大学と留学先では異なり同等の1単位とみなすことは妥当か」といったものであった。こうした疑問に答えるべく、研修先の視察によって研修内容の熟考が行なわれ、「研修先での3週間の外国語学習の内容が長崎大学での1学期分の内容に劣るものではない」ことを認めてもらうための議論が繰り返された。こうした背景から、筆者は、この3週間の英語研修が全学教育における英語授業に匹敵するものでなければならぬと理解しており、自ずと英語の学習が中心になるものと想像していた。しかし、実際に参加した学生から受けた印象は、少なくとも主催者側がこれまで議論を進めてきた「単位認定をとともなう短期留学」という性格は薄く、学生たちは英語学習「以外」あるいはそれ「以上」の何かのために参加しているように感じられた。それは例えば、「外国に行ってみたかったから」といった単純なものから「異文化体験を通じて日本や自分について考える」といったより洗練さ

れたものにいたるまで様々な理由があげられるが、ひとことで言えば、「海外体験学習」のグループを引率している雰囲気に近いものであった。出発前に参加の動機について、学生たちと具体的に話し合ったりする機会が無かったため、筆者の意識のうえで、こうしたギャップが生じたように思われる。

しかし、実際に学生たちが研修に参加している様子を見ていて、この短期研修は、「単位認定」のための英語学習のみならず、「海外体験学習」の側面を多分に含んでいると感じるようになった。確かに長崎大学の教室で英語の授業を受けている場合と比べれば、この研修の内容は、時として観光旅行のように映るかもしれない。しかし、そのどれをとっても、日本に居ては経験できないようなことであり、そうした経験を通じて文字通り「海外を体験する」こともこうした語学研修の目的のひとつではないだろうか。たとえ、その体験が直接の英語学習にならなくとも、それが将来の英語学習の動機付けにつながることもあるだろう。例えば、参加者の1人が研修終了後、「長崎大学で英語の授業を受けている時に考えることはただ2つだけです。出席回数が足りているかと単位が修得できるかだけです。パースに来て初めて、実際に使うために英語を学ぶことを考えました」と筆者に言ったのが印象的だった。さらに言えば、大学の国際教育理念の中にうまく位置付けられれば、この研修は、より明確な形で「海外体験学習」プログラムとしての存在意義を持つかもしれない。そこにいたってはもはや、「お金を払って1単位を買いに行く」といった発想は色あせてしまうだろう。海外短期語学研修の「単位認定」の条件は大学側の尽力で達成された。今後は、この研修プログラムが「単位認定」と「海外体験学習」の両側面から学生たちの間に浸透していくことが望まれる。そのためには、この研修プログラムの「単位」以外のメリットについても、より多くの学生たちに理解してもらおう努力が必要であると感じた。

5 今後の課題

まず第一の課題は、この研修プログラムを長崎大学に定着させることであろう。正直なところ、第1回目の派遣は、どういう形のもので出来上がるのかについて、ほとんど考えのないまま走り始めたといった雰囲気があった。研修プログラム実施中に起こった様々な出来事を、その場その場で対処していく中で、最終的にプログラムを終了したというのが本音である。それゆえ、次回以降のプログラムでは、第1回目の経験から学んだことをもう一度整理

し直し、研修の細部を明確に制度化していく努力が必要と思われる。そうすることによって、研修の目的や性格、そして内容が誰の目にも分かりやすく見えるようにしなければならない。その際、この研修プログラムを単に全学教育英語科目の「1単位を修得するため」の研修として位置付けるのではなく、より広い意味での「海外体験学習」の機会としてもっと積極的に宣伝することも求められるのではないだろうか。少なくとも第1回目の参加者から得た印象では、「単位がもらえるから費用を負担して参加しよう」という呼びかけだけでは、現実にそぐわないように思われる。この研修プログラムの「単位認定」以外のメリットについても、広く伝えていく必要がある。

第二の課題として、この研修プログラムにおけるホームステイの意義を再確認する必要がある。後になって考えれば、多くの学生たちにとって、今回の研修における最大のチャレンジはホームステイではなかったか、という気がする。特に、初めて外国へ行った学生たちにとって、いきなり慣れない英語を媒介にして現地の人々と寝食を共にするという経験は、非常に忍耐を要するものであったと想像される。それでも、学生たちがホームステイを通じて多くのことを学んだことも事実であろう。ホームステイは決して学生寮や下宿の代替ではなく、それ自体が「海外体験学習」の一部として大きな意味を持っている。それはまた、ひとつの英語習得法でもある。ホームステイも含めて、言語の習得方法には様々な方法がある。その意味で、こうした海外短期語学研修の機会を提供することによって、長崎大学は、学生に対して英語学習方法の選択肢を増やす努力を行なっていると見ることもできるのである。まさしく、「ホームステイを通じて英語を上達させましょう」という取り組みに他ならない。

第三に、危機管理体制の充実に対する継続的な努力が求められることにも異論は無いであろう。筆者は、20名の学生を引率してみても、この人数の学生たちが、あれほど広範囲な地域に分散して滞在するという実態について、長崎大学の関係者は事前にどれほど明確なイメージを持っていたのだろうかという疑問を覚えた。例えば、現地での連絡網も十分確立されていたとは言いがたい。こうした現地事情の把握を遅らせた一因は、ホームステイ先の情報がこちらに届いたのが出発間際だったことにもよる。次回からは、今回の経験を踏まえて、学生とECUおよびマックスリンク間の連絡網の整備をできるだけ早い時期から行なう必要があるだろう。また、海外渡航未経験の学生

たちに対しては、日本との連絡方法をわかりやすく伝えておく必要がある。今回は事故等に遭遇することなく全員無事帰国することができたが、こうした結果を決して当然視するのではなく、今後も危機管理への組織的取り組みを強化していかなければならない。

最後に、帰国後のフォローアップのあり方を検討することを、今後の課題のひとつとして挙げておきたい。研修に参加した学生の1人が「帰国したら英会話学校に通います」と言っていたが、研修で得た語学力やモチベーションを維持していくことにおいて、主催者はどのような支援ができるのであろうか。英語より先に実施された中国語研修では、中国語専任教員の指導のもと、研修修了者を対象に帰国後の特別授業が単位とは関係なく開講されている。英語研修修了者のために同様のフォローアップ授業を実施する計画は無い。しかしながら、新しく始まった海外短期語学研修を通じて芽生えた長崎大学の日本人学生と留学生センターとの関係が、一過性のものに終わることがないように望みたい。

参考文献

- 今井新悟 (2004) 「海外短期語学研修・ハワイ大学マノア校」『山口大学留学生センター紀要』第2号 pp. 89-91
- 千葉千枝子 (2003) 『ロングステイ・スタイル 悠々パース暮らし』総合ユニコム
- 永井智香子・村瀬隆彦 (2006) 「長崎大学における大学間交流の新しい取り組み」『留学交流』第18巻 第12号 pp. 10-13
- 渡辺淳一 (2004) 「海外短期語学研修・リジャイナ大学」『山口大学留学生センター紀要』第2号 pp. 75-88

(留学生センター准教授)